

第75回 企業活性化研究分科会・議事録

<第七五回 2015年1月24日(土) 時間:13:30~17:00 於:専修大学(神田校舎)>

参加者:井端、大野、木村、小林、杉本、高市、夏目、浜田、宮川、山本、渡邊(11名)

1. テーマ:再生企業の分析—ユニチカ株式会社の場合—

・報告者:宮川宏 ・配付資料:14枚

・報告内容の要旨

本報告は、ユニチカ株式会社(以下、ユニチカとする)の収益性分析を行い、再生のための課題を考察した。ユニチカの課題は、多額の有利子負債、脆弱な財務体質、収益事業への資源配分等をあげた。また収益性分析を行い、資本と利益の関係を推察した。ROAに関してROAの値は低く、資産の利用による利益獲得ができていないと分析した。とくにTの値は業種や規模により基本水準が異なるため、1を基準とするのではなく、業種や規模を考慮して判断を行う必要があるという議論があった。収益性分析をまとめると、リストラ等の業績改善策から十分な効果を得られていないため資産の利用効率が低下していると推察した。最後に企業行動とその要因に関する先行研究を概観し、再生可能性を検討した。再生可能性については、成長事業の研究開発と経営資源の集中、資金調達等の課題を指摘し、課題克服のためには経営者による従来の経営体質からの脱却、先見性のある意思決定を行えるかが再生の成否を決めると考察した。

2. テーマ:相関係数による売上債権回収状況の調査と事例分析

・報告者:井端和男 ・配付資料:15枚

・報告内容の要旨

本報告は、相関係数を用いて売上債権の回収状況を管理するための基礎的な検討を行った。本管理法では、回帰推定式により売上債権の各期末における正常値を推定し、実際残高との誤差を算出している。正常性に関しては、一期ずれの誤差間自己相関係数を算定し、相関係数の大きさにより売上債権の解消期間を推定することで、正常性と異常性を識別した。しかし、相関係数の判断基準について分析者の経験に左右されるため、一定の判断基準が必要なのではないかという議論が生じた。本報告は、売上債権回収状況調査のための事前報告であり、次回以降詳細に検討していく。

3. テーマ:格付会社に対する規制制度の変遷

・講演者:岡東務 ・配付資料:論文(抜刷)3冊

・講演内容の要旨

本講演は、格付けの仕組みおよび手順に伴う諸問題と、その問題に対応するために導入される格付会社に対する規制制度の歴史的変遷に関する内容であった。格付の問題の一つに利益相反の問題がある。企業に対する格付会社が一社であれば、企業に有利な格付けを出すことはできる。しかし、格付会社及び格付数が増加するとその妥当性が問われる。そのため、利益相反の問題は相対化が進むにつれてかなりの程度解消されると考察している。格付の利用者は、格付けの限界を認識したうえで、複数の格付記号とそれに付随するコメントに一読する必要があると指摘した。

4. 今後の予定について

・3月7日(土) 分析企業—株式会社雑貨屋ブルドグ— 高市先生

・4月 分析企業—株式会社クリーク・アンド・リバー— 杉本先生

・5月 分析企業—日本風力開発株式会社— 渡邊先生

(文責:夏目拓哉)